徒然なるままに…26

－年末の二つの研修をまとめて－

平成２７年１月８日
白島小学校　研修部

明けまして，おめでとうございます。先生方は，新しい年をどのように迎えられたでしょうか。私は，久々に家で落ち着いて新年を，と思っていましたが，家族が次々と体調を崩してしまい，大変でした。なかなかゆっくりできないものです。

年末は，二回の校内全体研を行いました。不謹慎なぐらいに押し迫っての研修だったにもかかわらず，多数ご参加くださって，ありがとうございました。ここで，私なりのまとめをしておきたいと思います。

１　校内全体研⑧―中学校区公開研　事前検討

(1)　１学年生活科「ふゆをたのしもう－ふゆのこうえんにいこう－」

この授業は，公園は，みんなが使うものであり，それを支えている人がいることが分かるという「公共(性)」と安全に気を付けて利用することができるようにするという「マナー・しつけ」の二つの理解をねらったものです。中町公園とそこで花植えなどの維持管理をされている坂井さんを取り上げています。

この授業について考えられることとして，次の二点が挙げられます。

１点目は，単元構成です。まず，「みんな」が行きたくなる公園の条件を見通しとして，実際に公園に出掛け，利用する人々の様子や設備から，公園は，いろいろな人たち(→「みんな」)が様々な用途で利用していることに気付きます。次に，利用者以外に，公園で花植えをしている坂井さんと出会い，「みんな」が気持ちよく公園を利用できるようにするために，(「みんな」の中には，)維持管理してくれている人がいることに気付きます。さらに，「『みんな』がもっと行きたくなる公園にするためにできることはないか。」と問い，利用者として，公園でできることを考え，実行するというストーリーが考えられるでしょう。中町公園，坂井さんという学区にあるものが題材ですから，必要に応じて出掛け，具体的に活動することも可能でしょう。

二点目は，この授業の内容のとらえ方についてです。今回目指す必要があるのは，「公共(性)」と考えられます。ここでの「公共(性)」には，二つのとらえ方があります。一つは，公園を利用者側からとらえ，様々な立場の人たちの集合としての「公共(性)」です。維持・管理者側からとらえ，一人一人(私)がみんな(公共)を支えているという「公共(性)」への参画です。

生活科は，「具体的な体験」(遊びではなく)と根底に裏付けられる「科学性」が必要だと言われます。それが，ここで述べたとらえ方です。授業者は，この点を意識して授業づくりをする必要があると思います。そして，これが社会科や理科の学習とリンクしていくものと考えられるのです。

(2)　２学年生活科「みんなでいこうよ　つかおうよ」

この授業は，１学年の授業がねらう「公共(性)」から，さらに，みんなで使う公共施設は，だれにとっても気持ちよく利用でき，生活に生かされているという公共施設の意味について考えることをねらっています。そこで，公共施設としての「こども図書館」と公共交通機関としての「アストラムライン」を取り上げ，共通点としての公共性に気付く単元構成となっています。

この授業は，「こども図書館」と「アストラムライン」との比較がカギとなると思います。特に，本時では，「なぜ，こども図書館とアストラムラインには，同じところがあるのだろうか。」と問い，「こども図書館とアストラムラインの共通点」に着目して，「公共のものにかかわる人々の思いや工夫に気付く」となっています。これについて，二つのことが考えられるのではないでしょうか。

一つ目は，問いと学習展開の整合性です。二つの公共施設を比較させ，共通点を見出したいのですから，導入で比較させ，共通点が見つかった段階で問うか，シンプルに，「こども図書館とアストラムラインには，どんな似ているところがあるだろうか。」と問えばいいと思います。

しかし，これだけだと，様々な観点からの共通点が出てきてしまうし，共通点から「公共性」に気付かせる手立てが明確になっていません。

そこで，二つ目は，思考の仕方の明確化です。ここでは，こども図書館とアストラムラインの設備やサービスから「利用者のためのもの」(観点)について「類別(分類)」することと，それらの目的を「類比」することを通して，公共施設を「意味付ける」ことが必要だと考えられます。この思考の仕方については，２で，詳しく触れてみたいと思います。

(3)　４学年社会科「わたしたちの県の様子－特色ある地域の人々のくらし－」

本単元は，地域の資源を保護・活用している地域とそこの人々の生活の特色について調べ，人々が協力して特色ある街づくりに努めていることに気付くことをねらっています。そこで，伝統的な技術を受け継ぐ地域として，廿日市市の「けん玉づくり」を，町おこしを行っている地域として，神石高原町の「ナマズの養殖」を取り上げています。

「けん玉づくり」については，まず，新教材に果敢にチャレンジされた尾越先生に拍手です。伝統的な技術・工業を受け継いで街づくりにつながっている事例は，なかなか見受けられないのが現状です。昨年は，嘉藤先生と私で「宮島彫り」を教材化しましたが，これも，宮島彫りを地場産業としてではなく，宮島の伝統文化として取り上げることとしました。その上，「熊野筆」は，適している一方，小社研では，代々やり尽くされた教材という感があります。それだけに，この挑戦は，立派です。

しかし，冷静に，「けん玉づくり」は，難しいというのが正直なところです。そのわけは，次の２点です。

１点目は，ここで取り上げるべきは，「けん玉づくり」であり，遊びやわざとしての「けん玉」文化ではない点です。ここでは，地域で伝統的に行われてきた地場作業やその地域の発展を目指した人々の取組を取り上げる必要があるからです。文化として取り上げるのならば，指導要領上，もう一つ，他の地域の地場産業を取り上げる必要が出てきます。

２点目は，「けん玉(づくり)」の普及活動と街づくりとの接点が明確でない点です。けん玉を普及しようとする団体の活動の域を超えられない懸念があるからです。「けん玉ワールドカップ」が行われた経緯，行政や他の団体の動きなど，さらに，調査し，整理する必要があるでしょう。
「ナマズの養殖」については，以前から曽我先生に相談を受けていて，おもしろいと思う一方，始まったばかりのこの取組から，実際に，街おこしをどう見せていくかが課題だと思っていました。そこを，ナマズの養殖による街の変化と他の地域の成功例との関連で克服しようとしています。
この授業について考えられることは，次の二点です。
１点目は，単純な単元構成についてです。神石高原町とナマズの養殖と出会って単元全体の問いを立て，ナマズの養殖を始めたわけに，養殖の仕方・地域の課題と人々の思い・取組の効果から迫り，成功例から街おこしの意味を考えるという構成に配列を組み直すことも考えられるでしょう。
２点目は，地域資源を生かすという側面の弱さです。例えば，養殖の仕方の学習の場面で，「なぜ，神石高原町では，ナマズの養殖に取り組むことができたのだろうか。」と問い，この取組が水資源の豊富さ，休耕田の活用，畜産の経験など，地域の地理的・歴史的条件を生かしたり，マイナス面をプラス面に転換したりしたものとして見えてくると考えられます。
実は，今年，５学年の水産業で，この取組をはじめ，山間地域の資源を生かした養殖業に少し触れました。これらの事例から，水産資源の減少などによる水産業の衰退を，いろいろな地域で，様々な条件を生かしながら克服しようとしていることに気付く学習を展開することも考えられるでしょう。
（4）　５学年社会科「本当の豊かさを問う」（環境を守る私たち）
この授業は，「水俣病」に立ち向かってきた水俣市の人々が，どのように「環境モデル都市」として歩んできたかを追究し，自分たちの環境の保全には，人と人とのつながりを大切にした地域づくりが必要なことに気付くことをねらっています。

年度当初，学年で１月に公開する授業について話したとき，私は，「水俣でいきませんか。」（「いきます。」とは言い切っていませんので，誤解のなきよう。）と提案しました。
水俣病は，高度経済成長の煽りの中で，事実を見逃してきた県・市，チッソ工場を擁護せざるをえなかった労働者，漁民，水俣病患者の利害の対立によって，人間関係が崩壊し，地域社会は壊滅しました。そこで，水俣市では，人のつながりを修復することによって，よりよい環境づくりをする「もやい直し」を進めてきたのです。
一方，環境保全は，清掃活動，魚や虫の放流活動，防犯パトロール等，地域レベルで行われています。これからの環境保全には，住みよい街にしようと，人と人とがつながり，地域住民みんなの手で街をつくっていくことが必要だということを示しています。
多くの環境学習では，自然のはたらきと環境保全の大切さについて考え，「エコ」で「地球にやさしい」生活，産業のあり方について考える学習が行われてきました。しかし，環境破壊によって，すべてを失った人々の苦しみやそれを乗り越え，街を蘇らせようと

した人々の努力を抜きに環境保全について考えるだけでは，ある意味，観念的な学習となる気がします。そこで，「水俣病」を取り上げることによって，人とのかかわり，地域づくりが環境保全を進めていく上で大切なことを学ぶとともに，自分たちの環境を守る心を育てることができるのではないか。日高先生の単元観には，環境保全は，結局人と人とのつながりと一人一人の心にかかっていることを伝えたいという思いがじっくりと述べられていると感じました。

ここで，単元観，目標，評価規準，ねらいなどの記述について感じたことを申し添えておきたいと思います。これらの記述は，その単元，その授業に対する授業者のスタンスの表現，説明の場です。したがって，もっと，具体的な内容をご自分の思いと言葉で表現されることをお勧めします。

単元観は，この教材のどこにどのようなメリットがあり，子どものこれまでの学習をどう深めることができるかという，その単元・教材のセールスポイントと授業者の「したいこと」を思い切り書いていただきたいと思います。教材・児童・指導の三観点に整理できにくい場合もあると思います。

目標・評価規準・ねらいは，具体的に考え，気付かせ，認識させたい内容をはっきりと書いていただきたいと思います。例えば，「なぜ，～なのかを考える。」というように，問いの形に表現してしまうときは，そこで明らかにしたい内容が明確になっていないためです。小社研や国立教育政策研究所などの形式の縛りがあると悩まれるかもしれませんが，形式が正しくても，中身の伝わらない記述ではもったいないですから，遠慮なく書いてみてください。きっと，だれかが直してくださいます。

２　校内全体研修会⑨－「思考スキル」と「思考ツール」の活用

関西大学　黒上晴男先生は，思考の仕方である「思考スキル」を１９種類示され，思考を促す手立てとして，２０数種類の「思考ツール」を考案されています。これは，様々な形に図示して情報を整理することによって，思考する手助けをするものです。詳しい内容のについてや私なりの見解は，すでに，１７号，市小社研夏季研研究報告レジュメで述べさせていただいていますので，参考にされてください。

現在，これらの成果をもとに授業づくりをしているのは，思考の行動化，活動化が子どもの思考を仕組む上で有効だと考えるからです。「学び合いシート」の思考の仕方の設定については，先生方もご苦労されていることと思います。

ここで，あらためて，１で示した２年生の生活科の授業を例に，考えてみたいと思います。

まず，本時案には，「『こども図書館とアストラムラインの共通点』に着目して，『公共のものにかかわる人々の思いや工夫に気付く。』」という思考の仕方が示されています。しかし，「着目点」が本時の話題になっていて，「考え方」が内容やねらいになっています。このパターンがわりと多いように思います。

「着目点」とは，考える切り口です。この授業で言えば，調べてきたことの中から取り上げたい二つの公共施設の「利用者のための設備やサービス」です。

「考え方」とは，ねらいを達成するために，どう考えさせるのかという具体的な思考活動です。この授業で言えば，１でも示した「類別(分類)」，「類比」，「意味付ける」となるでしょう。ここで具体的な思考活動として活用できると考えられるのが，「思考ス

キル」なのです。ねらいと内容(の構造)に即して問いを設定した上で，自分が問われたらどう考えるか，子どもがどう考えていけば，ねらう内容が認識されるだろうかと想定してみてください。

このように考えると，この授業における思考の仕方は，「『利用者のためのもの』に着目して，『設備やサービスを類別(分類)し，それらの目的を類比して，公共施設を意味付ける。』」となるでしょう。

ここで，忘れていただきたくないのは，「思考ツール」と思考のつながりを考えることです。「思考ツール」は，道具です。言い換えれば，モデルであり，形です。これをＨｏｗ　ｔｏ的に授業に取り入れただけでは，その思考が本時の教材・内容に適さず，気付かせたい内容を明らかにすることは，できません。教材・内容の構造とつながりから，どう考えさせればいいのか，その手助けとなる「思考ツール」は，どんな形にすればいいかと，思考を仕組むことが必要なのだと思います。

３　まとめにかえて－「挑戦」

とうとう，２７年が来てしまいました。何だか，あまり，実感は，わきません。でも，否応なく，全国大会の波に飲み込まれていくことでしょう。

今年の研究推進のテーマを「挑戦」にしたいと思います。私たちが「したい」と思う教材を取り上げ，お一人お一人にしかできない授業を創っていくことが「白島らしさ」ですし，研究大会の醍醐味だと考えるからです。木村先生が教頭先生に，「白島のことは，心配していない。」と話されたそうです。ある先生が「本校が取り組んでいることが分かってきました。これをもっと生かしていきましょう。」と私に話してくださいました。これらの言葉は，私たちみんなの取組一つ一つの積み重ねの賜物であり，激励だと思います。全国大会だろうが，社会科の専門でなかろうが，動じることなく，挑戦していきましょう。よろしくお願いいたします。